子どもとの出会い

――人と文化の蘇生――

本田和子

「まるで私の中には、子どものときの自分が、そのまま生き続け、活動しているみたいなんだ」[*1] モーリス・センダックは、自身の創造の源泉に触れて、こう語っている。そして、「私が一番恐れるのは、今も子どものままでいるそんな『私』と、つながりを失うことだ」[*2] と言う。

センダックは、言うまでもなく、現代アメリカを代表する最も優れた絵本の作り手である。そして、最近は、若者たちの間にも、異常なほどの「センダック・ブーム」が起こっていると伝えられている。若者たちが、センダックの世界に魅せられるとすれば、それは、彼の中の「子ども」に心を引かれるから、ということになろうか。そして、それは、彼らが、自身の内にも「子どもでいる私」を確認しようという営みに他ならない。存在の根を求めるまなざしが、優れて元型的であるセンダック世界に共感するのだ。

「内なる子ども」への憧憬などと言うなら、それは「童心讃美」に響くかも知れない。「子どもとは、そんなに素晴しいものだろうか」こんな問いが、直ちに投げ返されるだろう。果して、子どもとは、人間の渇仰に値し、無条件で肯定され得る存在な

のか、否か。

◈　◈　◈

ところで、センダックは、そして彼を愛する人々は皆、子どもの中に「永遠の無垢」を見ようとするのでもなければ、「天使である」と讃美するのでもない。彼らの立つ地平は、必ずしも、かつての「童心主義者たち」と同じではないのである。

センダックの代表作「かいじゅうたちのいるところ（Where the Wild Things Are, 1663）」は、題名の示すとおり、怪獣の充満する世界である。主人公のマックス少年も、最初から狼スーツに身を鎧うて、内なる野獣性に身を任せている。母親に代表される日常的な秩序は、もちろん、そんな彼の跳梁を許そうとしない。そこで、マックスは、憤然として日常世界に背を向ける。異次元の森の彼方、果てしなく広がる未知の荒海へ、彼は、眦を決して旅立っていくのだ。

行く手に出現したのは、怪獣たちの住む島であった。上陸した彼は、怪獣の王と仰がれ、思いきり野生の奔流に身を委ねる機会を待つ。わめき、跳び上り、木の枝にぶら下り……。そこに噴出するのは、まさに人間に潜む原初のエネルギーであり、島は、カーニバル的狂宴の場と化する。

センダックの世界において、マックスに代表される子どもは、天使どころか、怪獣たちの王、荒々しく野獣的なものの中でも、最大の野獣性の所有者とされている。子どもこそ野生的なもの、日常性の中に最も安住しにくい存在、と見るまなざしが、そこには潜んでいる。彼の作品世界では、小公子の「無垢」とも、或いはハイジの「自然性」とも異なった価値が、子どもの上に附与されているのだ。

これはまさに、現実の子どもとも照応し合う特性である。子どもたちが怪獣に寄せる熱い想いは、自身の内にうごめく荒々しく野生的なものの外界への投影であろう。彼らが、怪獣ごっこに夢中になるのは、単なる超能力への憧憬だけではない。自身の内なる暗黒に、具体的な形を与える試みなのだ。子どもたちは決して天使ではないし、私どもの内によみがえる「子ども」も、純白ではあり得ない。

マックスが到達した異次元の島、そこに住む怪獣たち、この暗くおどろ〳〵しく粗暴なるもの、分類体系のいずれにも属さず、あらゆる規範を超えた禦し難きものこそ、精神の深層に潜む豊饒の暗闇[*3]」である。そして、王として振舞う少年の姿は、この闇への同化、無意識の大海にすっぽりと沈みこんだ子ども

のありようを表現する。子どもとは、最もよく精神の深層に下降し得る存在であり、豊饒の暗闇に分け入っていく能力の保持者なのだ。

怪獣に象徴される深層の暗闇は、分類以前の混沌のゆえに、善でもあり、悪でもあり得る両義性を持っている。仮りに、私どもの眼が、それを「悪」と把えるとすれば、それは、文明という名の秩序が、混沌の侵入を恐れているからに他ならない。

◈　◈　◈

現代の若者たちがセンダックを必要とし、その作品世界に熱いまなざしを注いでいるのは、余りにも肥大した合理主義のゆえに涸渇しかけている生命力を、始原の力で活性化しようとの願いの表われであろう。センダック世界への共鳴を通じて、彼らの内側には「子どものよみがえり」が感じられる。それは、自身の始原の回復である。存在の根は、生命の源泉は、涸れ切ってはいなかったのだ。

自分の中に子どもという名の野生が生き続けていることに気付くなら、そして、その「子ども」が精神の深層と自在に往き来し得る優れた越境であることを認識するなら、私どもの生命は、新たな力で活性化されるだろう。「内なる子どもの回復」による存在そのものの蘇生である。

そのとき、日常的現実もまた、よみがえる可能性を孕(はら)む。進歩という名の下に、合理主義的現代を作り出した人間が、みずからの作り出した世界に窒息しかけている。然し、それら人間が、未だ統制されない始原のエネルギーを汲み取るすべを身につけるなら、日常的現実に対しても、再構築のための挑戦が可能となるだろう。

◈　◈　◈

ある詩人が歌った。砂場で遊ぶ子どもの姿が、最も神に似るのは、彼らが築き上げたものを惜し気もなくくずし去るときだ、[*4] と。子どもたちは、既に築き上げたものに執着しない。彼らのエネルギーは、常に新たな方向に奔出し、彼らを次の旅へと駆り立てる。子どもたちは、新しい営みは、「こわすこと」においてしか始まらず、そのゆえに「こわすこと」が活動の終着点であることに、気付いているのだ。

従って、子どもたちは、言うだろう。現代の文化が、人間を生き難くしているなら、改めて作り直せばよい、と。合理主義

への過大評価が、人を金縛りにしているとしたら、非合理に座を与えればよい、と。出来上ったものにこだわることはないのだ。

「然し……」と、大人たちの知性はためらいを抱く。それは、歴史と進化の否定ではないか、と。そんな惑いに対して、子どもたちのありようは明解である。彼らと言えども、現在の安定に心引かれることが、ないわけではない。ここにとどまっていようか、住み慣れたステージに定住したいと、そう望むこともしばしばである。にもかかわらず、彼らには、進むことが運命づけられている。成長とは、新しい世界へと旅することに他ならないのだ。

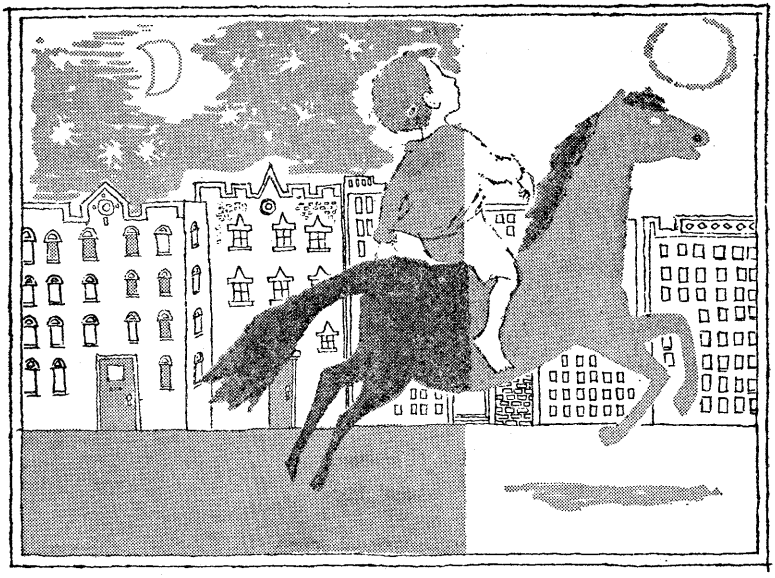
センダックは、そのデビュー作「ケニーの窓（Kenny's Window, 1956）」において、希望の中に旅立っていく少年の姿を描いている。ケニーは最初、「夢の庭」の安息を願った。太陽と月が同時に空にあり、いつも真白な花が咲きにおっている楽園で、「朝は夜の中に、夜は朝の中にいたい」と望んだ。彼の求めたのは、永遠のまどろみ、母胎の安息である。然し、ケニーは旅立っていった。始原の荒野を駒音高く駆けめぐり、混沌の荒海を白い船で帆走する。しかも、その船には、友人用の特別室が附いている。子どもたちは、大人とのきずなを一度は断ち切って、同年齢の仲間と手を携え、自己と世界の探究へと旅立っていくのだ。

不断の旅立ちのエネルギーは、精神の深層、無意識の豊饒の暗闇から汲み上げられてくる。旅立ちの前後に彼らが見せる姿、不安とか混乱などと見えるその姿は、現在と未来の間で引き裂かれながら、懸命に飛び立とうとしている心の表われである。さらに、非合理で暴走とも思える振る舞いは、始原のエネルギーを汲みに日常世界を後にする越境者の行為なのだ。

彼らのこんなありようは、無言の中に次のように語っている。「歴史とは、こうして作られてきたのではなかったか」と。私どもの中に、それを否定する根拠があるだろうか。

◈　◈　◈

私どもが、子どもの「自からなるありよう」を大切にしたいと願うのは、単なる郷愁や童心讃美ではない。「子どもを子どもとして」つまり、彼らの内なる野生に充分の座を与えて生活させようとするのは、「子どもたちの現在」にとって必要なだけではなく、私どもが、そして人間の文化が、よみがえり新しくされるために重要なのだ。



冨山房刊「ケニーのまど」より

マックス少年が最終的には温い夕食の待つわが家へ帰ってきたように、子どもたちは、疑いもなく日常世界の住人である。異次元に同化し切ることもなく、無意識の暗闇に沈みこんでしまうこともない。必ず、それもさほどの時間をおかずに、彼らは、再び日常性の中に立ち戻ってくるだろう。しかも、新しい活力に、全身を充たされて……。

私どもは、日常的秩序を守ろうとする余りに、彼らを体制に同化させることを急ぎ過ぎ、その野生を殺してはいないだろうか。混沌、非定形な子どもたちの世界を、非合理と見えるままに大切にしないならば、彼らの現在を不幸に終らせるだけではなく、私どももまた、滅びの道を歩まざるを得ないだろう。すなわち、私どもは、彼らによって「内なる野生」を再生させ得ず、人間の文化もまた、蘇生の機会を失なうに相違ないのである。

＊1　M・センダック「わがイラストレーション」『子どもの館』22号

＊2　N. Hentoff, "Among the Wild Things" 1966.

＊3　山口昌男「道化の宇宙」『朝日ジャーナル』1977・3月11日号

＊4　多田智満子「子供の領分」『多田智満子詩集』1972